

# 道標

夏の調査旅行から帰国して1カ月もたたないのに、また1週間、アメリカへ行ってきました。今回は学生の海外スクーリング(学習指導)の引率です。短い旅でしたが、できるだけ多くのものを見せたいと考えました。何よりもあの国の大きさと、多様性と人々の優しさを肌で感じてほしいと思います。観光客が見る表面的な部分ばかりでなく、普通の人々の日常も感じさせたい。大都市ばかりでなく農村も見たい。いわゆる「観光」は、初日に金門橋などのサンフランシスコの名所を駆け足で回ったのと、3日目のヨセミテ国立公園に絞りました。

2日目は、朝7時に宿を出て、バスで2時間ばかり南下し、モントレイ郡のサリナスという小さな町に向かいました。「アメリカのサラトワ」と

## サンフランシスコ便り

2011. 10. 30



村川 庸子

敬愛大国際学部教授

言われる農業の町です。ハロウィーンのかぼちゃが彩りを添える農場を、干し草を積んだ荷車に乗って1周。有機農法で育てられたセロリを口に含むと、思わず「甘い」という声が漏れます。車窓から見ただけでは広いねえ」

# 心打つ移民の生き方

で済んでしまったはずのアメリカの農村ですが、踏みしめた大地の固さや土の匂い、セロリの味は覚えておいてくれるでしょうか。

次に向かったのはスタインベックの博物館。「エデンの東」や「怒りの葡萄」

「葡萄」で知られるノーベル賞作家です。スタンフォード大学に入学したということですから裕福な育ちだったと思いますが、大学を中退し、農作業などしながらカリフォルニア各地をさまよいました。同行した同僚は現代アメリカ文学の専門家です。事前に授業で彼の作品を取り上げておいてくれました。

カリフォルニア大学サンタクルーズ校(UCSC)は、院生のマイケルさんに案内してもらいました。2001年(約810秒)という広大なキャンパス、レッドウッドの森に展開する校舎群や図書館。学内の移動は自転車や

シャトルバスで行われるそうですが、アップダウンが多くて自転車は大変そうです。谷間から鹿が急な坂を駆け上がって行きました。

この日の締めはワッソンビルという、日系人が多く居住する町の仏教会

## ふるさと伝言

で開かれた会合でした。戦後に米国に移住した日系1世の永嶺兄弟とその人生をテーマに、戦中、戦後の日本の歴史を研究するクリスティー教授率いるUCSCの研究グループの学生たちとの交流会でした。食事も用意され、歓迎していただきましたが、仏教会の花山先生と永嶺さんのごあいさつは学生の心に残ったようです。「しっかりと勉強しなさいよ」「これからの人は4カ国語は必要です」

アメリカに住む日本人や日系人は、厳しい人種差別や経済競争の中、遅く生きてきました。私も若いころから、「身につけた物だけは奪われることが無い」という彼らの言葉を繰り返し聞きました。花山先生はその移民の方々にと寄り添ってきた方です。私たち世代の日本人は、今の若者にこれほど説得力のある言葉で語り掛けることができるでしょうか。それに値する生き方をしてきたでしょうか。私にとっても、いろいろと考えさせられる旅になりました。

(むらかわ・ようこ、今治市出身)